新潮文庫

シャーロック・ホームズの冒険

コナン・ドイル
延原　謙譯

新潮社

シャーロック・ホームズ
の冒険

定価 110 円

新潮文庫

昭和二十八年三月三十一日 発行
昭和三十一年六月十日 十一刷

訳者 延原謙

発行者 佐藤亮一
東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(34)代表七一一一—八番
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・光邦印刷株式会社 製本・大進堂製本所
Printed in Japan

新潮文庫

シャーロック・ホームズの冒険

コナン・ドイル

延原　謙訳

新潮社版

512

目次

ボヘミアの醜聞……七
赤髪組合……四四
花婿失踪事件……八〇
ボスコム谷の惨劇……一〇六
オレンヂの種五つ……一四三
唇の捩れた男……一七一
青い紅玉……二〇八
まだらの紐……二三八
花嫁失踪事件……二七六
栂屋敷……三〇八
解説……三四八

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

シャーロック・ホームズの冒険

ボヘミアの醜聞

一

シャーロック・ホームズは彼女のことをいつでも「あの女」とだけいう。ほかの名でよぶのを、ついぞ聞いたことがない。彼の視野のなかでは、彼女が女性のぜんたいを蔽いかくしているから、女とさえいえば、すぐに彼女を思いだすことにもなるのだ。とはいつても「あの女」すなわちアイリーネ・アドラに対して彼が恋愛めいた感情を抱いているというのではない。あらゆる情緒、ことに愛情のごときは、冷静で的確、おどろくばかり均勢のとれた彼の心性と、およそ相容れぬものなのだ。思うに彼は、推理観察をやらせては、世にたぐいなき完全な機械だけれど、こと恋愛となると、まるきり手も足もでない不器用な男だつた。やさしい感情上の問題なぞ、口にしたこともない。たまさかいうかと思えば、必ずひやかしか罵倒まじりだつた。やさしい感情、それははたから見てもまことに結構なもので、とりわけ人の意志や行為を蔽う帷を払いのけてくれる効果は大きい。けれども、訓練のゆきとどいた推理家にとつて、細心に整頓されたデリケートな心境のなかに、そうした闖入者を許すのは、紛れを起させるものであり、その精神的成果のうえに、一抹の疑念を投ずることにもなるのである。鋭敏な機械のなかに入つた砂一つぶ、彼のもつ強力な拡大鏡に生じた一個の亀裂といえども、彼のもつような稟性のなかに、熾烈な感情の忍びいつた場合にもまして、厄介な妨害となることはあるまい。そのホームズにしてなお、忘れがた

き女性が一人だけあつたのだ。その女性こそは、かのいかがわしき記憶にのこる故アイリーネ・アドラその人である。

ちかごろ私は、ホームズにはさつぱり会わなかつた。私の結婚（「四つの署名」参照―訳者）が、二人のあいだを遠ざけたのだ。私としてこのうえない幸福、初めて一家の主人となつた者が、身辺に発見する家庭中心の団欒気分は、私の心を奪いさるに十分であつた。一方ホームズのほうは、例の世事に無頓着な気質から、どんな形式での社交をも嫌悪して、ひとりベーカー街のふる巣に踏みとどまつて古本のなかに埋まり、コカインと功名心――麻薬による夢み心地の日と、彼一流の鋭い性格からくる旺盛な精力にもえたつ日の連続を、交互にくりかえしていたのである。

彼は相変らず犯罪の探究に余念なく、あの卓絶した才能と、おどろくべき観察力とを縦横に駆使して手掛りを追及し、謎をとき、本職の警察が絶望と見て手をひいた多くの事件と、取組んでいた。そのあいだ、彼の業績については、おぼろげながら耳にしたこともちよいちよいある。たとえばトレボフ殺人事件でオデッサへ招かれていつたこと、トリンコマリのアトキンソン兄弟の奇怪きわまる惨劇を解決したこと、さてはオランダの王室から頼まれたむつかしい使命を、いともみごとに果したことなどである。だが、そうした彼の活躍の模様は、ただ日々の新聞で一般の読者と同じに知るというだけのことで、旧友でもあり、一時は仕事の相手でさえあつた男だけれど、それ以上にはほとんど私も知るところがなかつたのである。

ある夜――詳しくいえば一八八八年三月二十日のことだが――私は往診の帰るさ（というのは、またもとの開業医に復帰していたので）ベーカー街を通りあわせ、求婚時代のあの楽しかつた思い出や、「緋色の研究」事件の陰惨なできごとなどと関連して、おそらく生涯忘れられないだろ

うあの戸口を目のあたりにして、急にホームズの顔がみたくなつた。あの非凡な才能をちかごろどんな風に駆使していることか、様子知りたさに矢も楯もたまらなくなつた。

見あげれば、彼の部屋はあかあかと灯火が輝やいている。そればかりか、ほんのちよつと見あげている間にも、背のたかい痩せた彼の影法師が、二度まで窓掛にちらついた。頭を深くたれ、手をうしろに組んで、もの思いにふけりながら、せかせかと部屋のなかを歩きまわつているのだ。彼の気持や習癖をよくのみこんでいる私には、その態度なり挙動なりで、何もかもがよくわかる。彼はまた事件を手がけているのだ！　コカインの人為的な夢み心地からさめて、新しい問題に熱中しているのだ。私はベルを引いた。そして、以前は私と共有だつた例の部屋へと通されたのである。

彼の態度は、そつけないほど淡々としていた。めずらしくもないことだが、それでも私の訪問は喜んでくれたと思う。ろくすっぽ口をきかず、しかしやさしい眼つきで、そこの肘掛椅子にかけろと手で示し、葉巻の函を投げてよこし、部屋の隅のウイスキやソーダ水のサイフォンのある場所を指さした。それから煖炉のまえにつつ立つて、例の妙に内省的な態度で、じつと私を見つめていつた。

「君には結婚が適つているんだ、と見える。このまえから見ると、七ポンド半は肥つたぜ。」

「七ポンドさ。」

「フーン、もう少しよく考えてからいうのだつた。ほんのちつとだけね。それで、また開業したらしいね。僕はそんな意向のあることなど聞かなかつたぜ。」

「ききもしないで、どうしてそんな事が分るんだい？」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「分るさ。推理でわかる。ちかごろ君は雨にあつてズブ濡れになつたし、君のうちにはひどくそそつかしい女中がいるなんてことも分るが、どうだ？」

「おやおや、君にあつちや敵わないよ。これで二三世紀もまえに生れていたら、君はまちがいなく火炙りになつてるぜ。なるほど僕は、この木曜日に田舎みちを歩いてて、たしかにズブ濡れになつて帰つてきたが、その服は着かえているんだから、どうしてそんな推論が下せるのだか、見当がつかない。女中のメリー・ジェーンなら、こいつは何とも始末におえない女でね、たまりかねて家内が、お払いばこの予告を申しわたしたが、それにしても、どうしてそんなことまで分るんだろう？」

ホームズは独りで悦にいつて、長い神経質な両手をこすりあわせながら、

「簡単そのものさ。僕の目には、君の左の靴の内がわの、ちようどその煖炉の火の照りはえている場所に、ほぼ平行な疵が六本みえる。これは明らかに、靴底の縁にこびりついた泥を掻きおとそうとして、そそつかしい者がつけた疵だ。そこで、二つの推論が抽きだせることになる。君が悪天候のとき外出したことと、君のうちの女中がロンドンきつてのやくざ女だという二つのね。君の開業していることだつてそうだ。ヨードホルムの臭いをプンプンさせ、右の食指に硝酸銀で焦けた黒い痕があり、さもここに聴診器を入れていますといわぬばかりに、シルクハットの一方をふくらませた紳士が入つてきたんだ。それでその紳士が開業医だとわからないようだつたら、僕はよくよくの間ぬけじやないか。」

説明をきいてみると、あんまり何でもないことなので、私は笑いださずにはいられなかつた。

「推論のよつて来るところを聞くと、いつでもばかばかしいほど簡単なので、僕にだつてできそ

うな気がするよ。それでいて実際は、説明をきくまでは、何が何だか分らないのだから情ない。眼だつて君より悪くなんかないつもりなんだがねえ。」

「それはそうさ。」とホームズは巻煙草に火をつけて、肘掛椅子にどかりと腰をおろしながら、「君はただ眼でみるだけで、観察ということをしない。見るのと観察するのとでは大ちがいなんだぜ。たとえば君は、玄関からこの部屋まであがつてくる途中の階段は、ずいぶん見ているだろう？」

「ずいぶん見ている」

「どのくらい？」

「何百回となくさ。」

「じやきくが、段は何段あるね？」

「何段？　知らないねえ。」

「そうだろうさ。心で視ないからだ。眼でみるだけなら、ずいぶん見ているんだがねえ。僕は十七段あると、ちやんと知つている。それは僕がこの眼でみて、そして心で視ているからだ。ところでね、君は僕のやつたつまらない事件に興味をもつているし、一つ二つは実際談を書いてくれたりしたほどだから、こいつは面白いかも知れないよ。」

と彼はテーブルのうえに拡げてあつた桃いろの厚手の用箋を一枚私のほうへ投げてよこして、

「さつき郵便できたばかりだ。大きい声で読んでみないか。」

手紙には日附がなく、差出人の住所も名も書いてはなかつた。文面は次のとおり——

今夕八時十五分まえ、貴家を訪問いたす者可有之、右はきわめて重大なる問題に関し、とくに貴下に諮りたき紳士にて候。最近貴下が欧州のさる王室に対して致されたる尽力は、貴下が形容を絶するこの重大事を、安んじて託さるべき人物たるを示すもの、この点はわれら各方面より聞知するところに候。同時刻にはかならずご在宅あい成りたく、かつ訪問者が覆面いたし居ることあるも、ご容赦然るべく候。

「妙な手紙だねえ。いったいどういうつもりなんだろう？」

「まだ材料が一つもない。資料もないのに、ああだこうだと理論的な説明をつけようとするのは、大きなまちがいだよ。人は事実に合う理論的な説明を求めようとしないで、理論的な説明に合うように、事実のほうを知らず知らず枉げがちになる。だが、それはともかくこの手紙だが、これから君はいったいどういうことを推知するね？」

私は注意ぶかく手紙の筆蹟や、その紙質などをあらためた。

「これを書いたのは、おそらく暮しむきのゆたかな男だろう。この紙じゃ一帖半クラウン以下では買えまいからね。妙に腰のつよい、ゴワゴワした紙だ。」私はつとめてホームズ流を模倣した。

「そこだ。たしかに妙な紙だよ。これはね、イギリスできの紙じゃないんだぜ。あかりに透かしてみたまえ。」

いわれたとおりにしてみると、小文字のgをそえた大文字のE、つぎに大文字のP、それから小文字のtをそえた大文字のGがすかしにはいっていた。

「何だと思う？」

「製紙家の名まえだろう。頭字をとつて入れたんだね。」
「それどころか。Gt. はドイツ語の Gesellschaft（ゲゼルシャフト）の略字で、会社という意味だ。英語の Co. にあたるわけだね。それからPはむろんドイツ語の Papier（パピア）（紙）だ。つぎに Eg. だが、これはちよつと大陸地名辞典をくつてみよう。」
ホームズは書棚から茶表紙の厚い本をとりおろして、
「Eglow（エグロウ）, Eglonitz（エグロニツツ）と、ああここに Egria（エグリア）というのが出ているよ。カールスバッドから遠くないボヘミア国の都会だから、むろんドイツ語が使われている。――ワレンシュタイン終焉の地として著名、ガラス工場並に製紙工場の多きをもつて知らる。――とある。ハハ、どうだい？」
彼の両眼は輝やいた。そして紫の煙を大きく、ほこらしげに吐きだした。
「するとこの紙はボヘミア国製なんだね？」
「正にそのとおり。そしてこの手紙を書いた人物がまたドイツ人だ。This account of you we have from all quarters received（この点はわれら各方面より聞知するところに候）なんていう文章の組みたてが変じやないか。フランス人やロシア人なら、こんな風には決して書かない。動詞をこんなに虐待して、文章の最後にもつてゆくのは、ドイツ人にかぎる。だからあとは、ボヘミア製の紙を使うこのドイツ人が、何を求めているか、何だつて覆面してまでくるのかということだけが、問題としてのこるわけだが、どうやらご本人がやつてきたらしいから、この疑問は直接といて貰うとするかね。」
このとき表に短切な蹄（ひづめ）の音と、土止石（どどめいし）にきしむ轍（わだち）のひびきが聞え、つづいてベルがつよくなりひびいた。

「あの音でみると馬車は二頭だてだね。」とホームズは大きな期待でヒュッと口笛をならし、窓からちらと下を見おろして、「ウム、りつぱな四輪馬車だ。馬もいい。一頭百五十ギニはする。ワトスン君、この事件は、たとい内容がどんなにつまらないにしても、金の関係だけは、話が大きいぜ、きつと。」

「じや僕は帰つたほうがいいだろうね？」

「そんなことないよ。構わないから、そこにいたまえ。伝記作者がそばにいてくれないと、張りあいがないからね。それに事件も面白そうだ。こんなのを聞きのがすという手はないぜ。」

「でも依頼者のほうで……」

「そんな心配をすることはないよ。僕も手伝つて貰わなきやならないかも知れず、向うだつてやつぱりそうだろう。さ、来たぜ。その肘掛椅子にかけて、できるだけの注意を集中していたまえ。」

おちついた重いあし音が、階段をのぼつて、廊下をこつちへ、やがてドアのそとで止つたと思つたら、たれ憚らぬ大きなノックが聞えた。

「おはいり。」

ホームズの声に応じて入つてきたのは、うちわに見ても身のたけ六フィト六インチは下らず、神話のヘルクレスのような逞ましい体格の男であつた。服装は立派であるが、但しこんな風な美々しさは、イギリスではむしろ下品と見なされるだろう。上衣の袖と両前の襟には幅ひろくアストラカン毛皮の折返しをみせ、両袖を肩にはねあげた濃紺のトンビには、まつ赤な絹裏がつけてあり、キラキラ光る緑玉石一顆をかざつたブローチで襟もとをとめている。そして脛の半ばまでな

る長靴の、上端にふさふさした茶いろの毛皮をつけたのを穿いたところは、いよいよもつて全体の下品な豊かさの感じを強めていた。それが片手には鍔びろの帽子をもち、顔の上半分は、額から顴骨の下までもある眉庇がたの黒いマスクでかくしているが、ちようどその具合をなおしたところと見えて、入つてきたときは、まだ片手をそこへやつていた。顔の下半分の、見えている部分だけから察するに、強い性格の持主らしく、厚くつき出た唇、まつすぐに長くのびた頤などは、強情といつてもよい剛毅さを思わせた。

「手紙は見ましたろうな？」深い、耳ざわりな声で、ひどいドイツ訛りがあつた。「訪ねて参ると申しておいたのだが――」

どつちへ話しかけてよいか、迷うらしく、私たち二人を見くらべた。

「どうぞお掛け下さい。」ホームズがいつた。「こちらは私の親友でもあり、仕事のうえの共同者でもあるワトスン博士で、事件を手伝つてくれたことも度々あります。してご尊名は？」

「名まえは、フォン・クラム伯爵と呼んで貰いましよう。ボヘミア国の貴族です。親友だといわるるが、この紳士は、大事を語る思慮と信義を備えた仁と考えてよろしかろうな？　さもなければ、貴君と二人だけで話しあうほうが、自分としては好ましいのだが。」

私は立つて、無言のまま出てゆこうとした。するとホームズが手首をつかんで、もとの椅子に押し戻しながらいつた。

「こちらは二人でなくば、お聞き致さないまでです。私におつしやるほどのことでしたら、どんなことでもこの男に聞かせて差支えございません。」

伯爵はその広い肩をそびやかして、「では始めるが、そのまえにまず、二年間は絶対に秘密を

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com